

## 群馬県カモシカ個体群の年齢的特徴

姉崎智子（群馬県立自然史博物館）

ニホンカモシカ (*Capricornis crispus*) (以下、カモシカ) は、日本の固有種であり、本州、四国、九州に生息する。森林内で単独生活し、定住性の大型哺乳類である。捕獲により個体群が著しく減少したため、また、固有種としての学術的価値から、1934 (昭和 9) 年に「史蹟名勝天然記念物保存法」により天然記念物に種指定され、その後制定された「文化財保護法 (昭和 25 年法律第 214 号)」により 1955 (昭和 30) 年に特別天然記念物に指定され、保護対策が取られてきた。しかし、近年、カモシカによる農林業被害が増加したため、一部の地域において個体数調整による捕獲が進められている。本発表では、捕獲検体の分析に基づき群馬県におけるカモシカ個体群の年齢的特徴について検討した。

群馬県においては、カモシカの個体数調整は、嬭恋村で 2007 年度から、昭和村で 2009 年度から、片品村で 2011 年度から、利根町、中之条町で 2013 年度から個体数調整を実施している。嬭恋村、昭和村、片品村では、主に冬季に巻狩りによって捕獲が行われ、利根町、中之条町については春から秋の農作物被害が発生する時期に、くくりわなによって捕獲が行われている。冬季の巻狩りによる捕獲は、地域に生息する個体群をランダムに捕獲している可能性が高く、地域個体群の年齢構成をある程度反映するものと推定されることから (姉崎 2013)、本発表では嬭恋村、昭和村、片品村のカモシカを分析の対象とした。

カモシカの年齢査定は、角輪法 (Miura, 1985) にて行った。得られた年齢組成に基づき、Caughley (1977)、三浦・安井 (1979)、常田ほか (1983)、三浦 (2003) にしたがって生命表を作成し、生命表の年齢別生存数 ( $l_x$ ) をもとに生存曲線を作成した。

分析の結果、嬭恋村、昭和村、片品村のカモシカの生存曲線は「L 字」型に近く、オス、メスともに若い時期に死亡率が高く、年齢とともに死亡率が減るパターンを示した (Tokida and Miura 1988 ; 生江・青井 2007)。これは多くの哺乳類で認められるパターンであり (Caughley 1966; Edberhardt 1985)、岐阜県、長野県、岩手県など既存のニホンカモシカの報告 (三浦 1986 ; Tokida and Miura 1988) とも矛盾しない。しかし一方で、他県と異なり、本県においてはオスの死亡率が高く、寿命も短い傾向が確認された。その要因として、嬭恋村ではメスよりもオスが多く捕獲されており (姉崎 2014)、地域的に雌雄数の不均衡を引き起こしていることが示唆される。しかし、昭和村、片品村については雌雄の捕獲頭数に大きな差はなく、捕獲によるバイアスの可能性も否定できない。

キーワード ニホンカモシカ、群馬県、生命表、生存曲線、年齢的特徴